

人文学部 後期日程 令和6年度入学試験 小論文
出題意図と解答例

I

【出題意図】

遺伝子編集は、倫理的な問題などをめぐってこのところよく話題になる技術なので、何かしら既に考えたことがある受験者もいるだろう。しかし、問2が受験者に求めているのは、筆者が言及している複数の「懸念」について意見を述べることであり、しかも回答欄の文字数は少なめに設定されている。つまりここで受験者は、英文読解能力とともに、ものごとを多角的に考える力と、考えたことを簡潔にまとめる力が試されている。

問1

遺伝子編集による病気の治療は、実用段階に入ると多額の費用を要するものとなり、低・中所得国の人々は受けたくても受けられないという不公平が生じるのではないか、という問題。(83字)

問2

筆者は遺伝子編集医療に関する懸念として、①問1にもある不公平の可能性、②未知の側面があること、③営利目的の逸脱した使用、特に強化への応用の可能性、そして④デザイナーベビーの問題に言及している。このうちまず②については、当然だが、実用化を急ぎすぎてはならないと言うほかない。①の不公平は、病気の治療に関する限り解消できると思う。中立的な国際機関がこの医療を管轄すればいいのである。実現は困難だろうが、望ましいのは明らかにこれだ。しかし③の強化は、仮にそれ自体は倫理的に許されるとしても、実施は富裕な人々が私費を投じる場合に限られ、その結果、貧富の差が能力等における遺伝子レベルの差に繋がりがかねない。そして、この不公平が解消できるとは考えにくい。同じことは④にも言える。だが、④の場合はさらに、当人の同意がない遺伝子の改変であるため、人権の回復不可能な侵害を招くことが危惧される。(388字)

II

【出題意図】

出題文中で紹介されているタイ〜ラオスで遊動生活を送る少数民族の言語における感情表現と、またトルコ語やダバニ語、そして受験者が知る日本語や英語と言ったメジャーな言語における感情表現との比較を通じて、人の感情ひいては人間そのものを理解するには多様性を念頭に置いて考察することが求められる点を把握するのが重要である。受験生自身がこれまで認識してきた「感情」を、日本語の観点にはない新しい視点でとらえ直すことができるかどうかポイントである。

問1

ターワツ村に到着したムラブリの人々は村在住のムラブリに会っても、ウドムさんが予想していたような喜びの表情も見せずまた抱き合って感激するといった態度も示すことなく、しばらくするともう森に帰ると言った。(99字)

問2

人間なら感情があるものだと言われれば一般的に認識されがちであるが、それは感情を表す言語があって初めて成り立つ認識である。山岳地帯で遊動生活を送る少数民族であるムラブリは、感情を表出することを避ける生活形態を有している。森の中で貴重な食料を得るための狩りを成功させるには、獲物に気取られないため興奮を抑える必要があるだろう。また自分たちが属する集団を守るためには他民族との接触を注意深く回避することになり、自らの言語でコミュニケーションをとる相手は自集団の仲間という狭い範囲に限られる。コミュニケーション

をとる相手が限られるのならば、心の内にある感情の動きをいちいち言葉で表出しなくても自集団の中では理解し合える関係が形成される。このようにその民族が有する生活形態における感情の扱いは、その民族が有する言語にも影響を与え、そこに見られる感情表現は他の言語とは異なる特徴を持つことに繋がるのだ。(395字)